

愛媛県庁 正会員 ○立川弘樹
 愛媛大学工学部 フェロー 柏谷増男
 愛媛大学大学院 正会員 山田耕介

1. はじめに

わが国では高度経済成長とともに山村集落は過疎化に見舞われ、集落は衰退の一途をたどっているところが少なくない。これらの地域では人口流出に伴う施設数の減少、公共交通機関の削減により住民の暮らしはますます不便なものとなっている。ただ、過疎地域といっても中心部と末端集落とでは住民の交通形態も大きく異なると思われ、特に末端集落では自家用車を持たぬ人にとっては外出も満足にできない人もおられるかもしれない。

つまり、都市部では施設の質・量が身近なところにあるために交通所要時間は短くて済む。一方、過疎地域では施設の質・量がその地域内では充分満たされてはいない。中心部から離れると生活に必要な最小限の施設しか立地していない地域もある。より高度な活動を行おうと思えば他の地域に出かけて行くしかない。この場合は交通所要時間は長いものとなる。

本研究では山村部として上浮穴郡久万町を、都市部として松山市を取り上げ、住民の生活活動と生活行動に関する交通ダイアリー調査を行う。交通ダイアリー調査を行うことで従来のように短いトリップの記入漏れなどをなくし、正確な住民の生活活動を得られるものと考えられる。

2. 対象地域

(1) 対象地域：上浮穴郡久万町

久万町に位置する集落は4本の谷筋に沿って細長く分布し、はっきりと4つの地区に分かれている。これは4つの小さな村が合併して上浮穴郡久万町が成立した名残である。4つの地区は西から順に父二峰地区、久万地区、畑野川地区、直瀬地区と呼ばれ、この中の久万地区が町の規模・人口共に最大であり久万町の中心地である。



(2) 対象地域内の道路網

久万地区では松山と高知を結ぶ国道33号線が南北に走っており、久万地区以外では細長く分布する集落を結ぶ県道が南北に一本走っている。久万地区以外の3地区では道路の北端は行き止まり、南端は隣の町（父二峰地区からは小田町、畑野川地区と直瀬地区からは美川村）へとつながっている。4地区を横に結ぶ道路は国道または県道であるが数が少なく、災害などで不通になると住民は孤立してしまうか大幅な迂回を強いられることとなる。それほど重要な道路にも関わらず1車線の狭隘区間が残っており改良工事が進行中である。これは4つの地区が谷筋に沿って平行に位置しておりその間には険しい山が横たわっているため、山を1つ越える山岳道路とならざるを得ないという理由によるものであり、また改良済み区間も急勾配・急カーブはあまり解消されていない。地区内の道路に着目すると久万町中心部集落以外のほとんどの道路が幅員3m未満の道路であり、樹枝状の形態をしている。つまり地区内の県道からそれて集落へとつながる町道を通り、さらにそれぞれの自宅へとつながる私道を通して自宅に到着するという道路の形態となっている。畑野川地区・直瀬地区共に末端集落に行くに従って道路の状態は悪くなり、場所を選ばなければ車のすれ違いが不可能という道路も多い。

3. 調査方法

住民の交通行動のアンケートを行った。対象地域とした久万町、松山市から一世帯で2人を調査の対象としたが学生は対象外とした。対象は久万町から60世帯120人、松山市から30世帯60人である。

アンケートの調査期間は1999年5月20日（木）～5月26日（水）までの一週間である。

アンケート用紙の配布は久万町内は久万町役場を通じて各地区などの町内会長などに配布依頼をして協力いただいた。そして、調査期間後アンケート用紙の回収に行った。アンケート用紙の回収方法は久万町役場の代表者の方に預けてもらい、我々が用紙を回収に行く方法を用いた。その後、解答用紙のチェックを行い記入漏れや明らかに不明な点があった場合そのアンケート用紙をもう一度記入していただくように郵送し、後日回収した。

松山市は久万町の比較として行った。松山市での配布は愛媛大学の学生を通して配布した。回収方法は学校への提出を依頼した。

配布したアンケート用紙は「活動日誌票」と「属性調査票」の2種類である。活動日誌は毎日の行動を簡単に記入していただくアンケートである。活動日記の方で活動内容や活動場所、活動時間、移動時間、移動手段などを記入してもらい、地図上には活動場所の位置と活動場所の施設名を記入してもらった。このように同一の活動を二重に記録してもらうようにすると、回答者が記入する量は増えるが、両方を簡単にチェックできるために、調査票の回収時に記入漏れや誤りの訂正を求めることができる。属性調査票は回答者の属性や普段の活動場所に関する意識をお答えいただくためのアンケートです。

4. 調査結果

(a) 松山市・久万町ともに一週間の平均トリップ数は約4であった。また平日・休日における平均トリップ数も差はなかった。

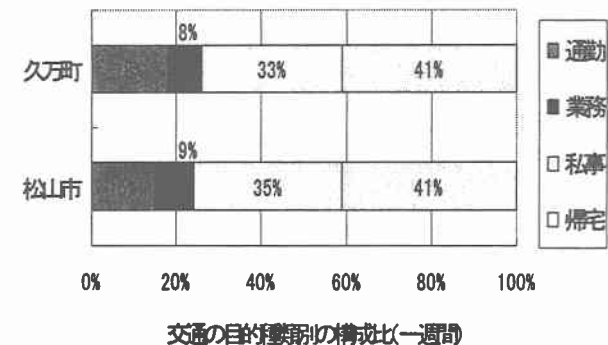
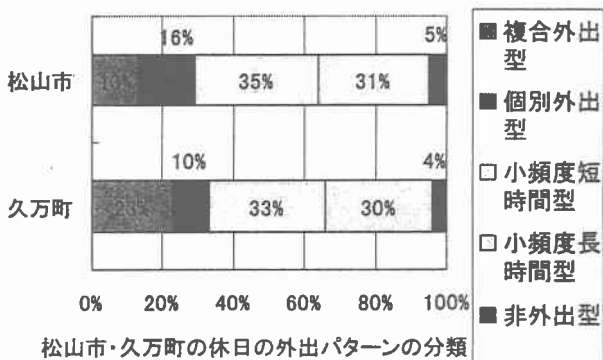
(b) 松山市より久万町の方がより車への依存度が高かった。また中心部より離れていけば行くほどその依存度も高くなった。また、久万町では二輪車（自転車）、徒歩での移動はあまり見られなかった。

(c) 久万町の休日での買い物は多くの人が松山へ出かけていた。平日は久万町内での買い物が多かった。

た。

(d) 久万町では複合外出型（一度家を出るといろいろな所に立ち寄って帰る）、松山市では個別外出型（1日に3度以上出かける）の外出パターンが高かった。

(e) 非外出の割合も松山市と久万町ともに3～4%であり、山間部だからと言って非外出率が特別高いものではなかった。また外出していない人は病気や自営業など外出できない状況にある人が多かった。



5. おわりに

今後の課題としてダイアリー調査は回答者に負担が大きいため、回答者が答えやすく負担の少ないアンケート用紙の作成が挙げられる。また分析しやすいように記入時間や記入場所を細かく設定した方がよい。